

NASHIM

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信

Contents

- 第 12 回永井隆平和記念・長崎賞の授与
- ブロンズ像「生命のともしび」について
- 国際貢献事業の実施
- 第 20 回ながさき国際協力・交流フェスティバルへの出展
- 韓国への専門家派遣事業の実施（第 1 回、第 2 回）
- 韓国医師等の受入研修事業の実施（第 1 回、第 2 回）
- 平成 31 年度の出前講座の実施について



第 12 回永井隆平和記念・長崎賞受賞者を囲む記念写真 平成 31 年 2 月 8 日 ホテルニュー長崎 にて
(前列中央が受賞者のボグダノフ教授、その右がハルチェンコ駐日ウクライナ大使、左が森崎 NASHIM 会長)

第12回永井隆平和記念・長崎賞

ウクライナのタチアナ・ボグダノワ教授に授与

NASHIMでは、故 永井隆博士の崇高な平和希求の精神を引き継ぎ、国際社会におけるヒバクシャ医療への貢献者を広く顕彰することにより、その継承者を育成し、将来に向けた原爆関連医療の遺産を継承することを目的として、長崎原爆50周年にあたる平成7年に「永井隆平和記念・長崎賞」を制定しました。

この賞は、原子爆弾による被爆、放射線事故等による被曝に関する治療及び調査・研究の分野において、ヒバクシャ医療の向上・発展、ヒバクシャの福祉の向上を通じて世界平和に貢献し、将来にわたり活躍が期待される国内外の個人や団体に授与しています。

12回目となる今回は、ウクライナ国立内分泌代謝研究所 内分泌病理研究部門長 のタチアナ・ボグダノワ教授に授与することとし、2月8日（金）にホテルニュー長崎において授賞式を開催しました。



タチアナ・ボグダノワ教授

【永井隆（ながい たかし）博士 について】

昭和20年（1945年）8月、長崎医科大学（現 長崎大学医学部）で原子爆弾により重症を負いながら、被爆者の救護活動に挺身されました。翌年、同大学の教授とされましたが、白血病で倒れ、病床上で「この子を残して」「長崎の鐘」等多くの著作を発表し、祈りと平和を訴え続けられました。

その崇高な平和希求の精神と活動は、今なお、多くの人々に感銘を与えています。

受賞式

授賞式において、森崎正幸 NASHIM会長 が受賞者のタチアナ・ボグダノワ教授へ賞状楯、賞牌（ブロンズ像）、副賞（賞金100万円）を贈呈しました。

また、永井隆記念館の永井徳三郎館長（永井博士の孫）より花束が贈呈されました。



森崎会長より賞牌の贈呈



永井館長より花束の贈呈

授賞式の後には、ボグダノワ教授の記念講演「チェルノブイリ事故後における甲状腺がんの病理～ウクライナの経験から～」が行われ、記者会見、祝賀会と続きました。



左から賞金目録・賞状楯、ブロンズ像「生命のともしび」

【賞状楯（見開き右側）の日本語訳】

第12回永井隆平和記念・長崎賞 タチアナ・ボグダノワ 様

あなたは永年にわたり、チェルノブイリ原発事故被災者への病理学的診断の分野において、多大の尽力をされ、その研究と実践を通し、世界平和とヒバクシャ医療の向上に大きく貢献されました。

よって、ここに第12回永井隆平和記念・長崎賞を贈り、その功績を称えます。

2019年2月8日 長崎・ヒバクシャ医療国際協力会 会長 森崎 正幸

受賞者の概要及び受賞理由

1. 氏名 Tetiana Bogdanova (タチアナ ボグダノワ)

2. 生年月日・国籍 1948年4月8日生 (70歳) ウクライナ

3. 主な経歴

- ・1974年～1992年 国立内分泌代謝研究所 研究員
- ・1992年～ 現在 国立内分泌代謝研究所 内分泌病理研究部門長
- ・2002年～ キエフ国立大学教授 (内分泌学)

4. 受賞の理由

タチアナ・ボグダノワ氏は、内分泌病理学の専門家として放射線誘発甲状腺がんに着目し、チェルノブイリ原発事故により被ばくした若年者の甲状腺がんの診断及び調査研究において、長年に亘り多大な貢献をされてきました。

ボグダノワ氏は、チェルノブイリ原発事故の発生後に多発した放射線誘発小児甲状腺がんについて、病理学の観点からその特徴を詳細に検討し、他の研究者との共同研究も数多く行われています。

また、ボグダノワ氏が参画した甲状腺がん国際チェルノブイリ組織バンク (CTB) では、ウクライナにおける組織の立ち上げと甲状腺がんサンプルの収集や病理標本の作成において、主導的な役割を果たされました。

さらにボグダノワ氏は、EU、アメリカ、ドイツ、日本との数多くの共同国際プロジェクトに参画し、国内外の学会や会議で、これまでに得た重要な知見を発表されています。

以上のように、研究者個人及び組織の指導者としての2つの側面から、タチアナ・ボグダノワ氏の高い専門性と模範的な活動を評価し、今回の受賞となりました。



2011年 共同研究 ロンドンにて
(左側手前から3人目がボグダノワ教授)



2006年 来崎時の写真
(前列右端がボグダノワ教授)

第12回 永井隆平和記念・長崎賞を受賞して



ウクライナ国立内分泌代謝研究所 内分泌病理研究部門長

タチアナ ボグダノワ

研究を共にしてきた皆様へ

浦上の聖人と呼ばれる永井隆博士の名を冠した賞をいただくことは、大変名誉なことです。永井隆博士は、医療による救済が必要な人達に、若くして無私の精神で奉仕されました。彼は、耳が不自由で一般内科医として従事することができず別の専攻領域を選択せざるを得なくなりました。そして彼は、神の啓示か天命によるものか、放射線医学を選ぶことになりました。1930年代のこの医療分野は、まだ初歩の段階であったため、放射線被ばくの管理不足により危険な状態でしたが、それが、ほんの10年後には、彼が愛する国や街にとって最も必要なものとなりました。



永井博士のお墓参りをされるボグダノワ教授（左）



永井博士が晩年を過ごされた如己堂にて

1986年4月26日のチェルノブイリ原発事故による影響があった国々の人たちは、広島や長崎のように数十万人が亡くなるということがなく、とりわけ真実の情報がなく、目に見えない放射線に満ちた「チェルノブイリの雲」の危険性を本当に理解することができませんでした。一方でチェルノブイリでは、事故の結果に当初より対応した多数の人々が私心を捨てて奮闘し、数千もの医師が人々の生命や健康を守るために可能なことのすべてを行いました。事故後、大量の放射性ヨウ素が大気中に放出（ウクライナの数ヶ所では1㎡あたり5メガベクレルまで上昇）されたことが分かっていたなら、甲状腺がんの発生率が、特に高い放射線量を甲状腺に取り込む子供たちにおいて、著しく増加することを予想することができました。



1986年 チェルノブイリ原発事故発生



1998年 L.A. イリーン著「チェルノブイリ：虚偽と真実」の邦訳を NASHIM が発刊

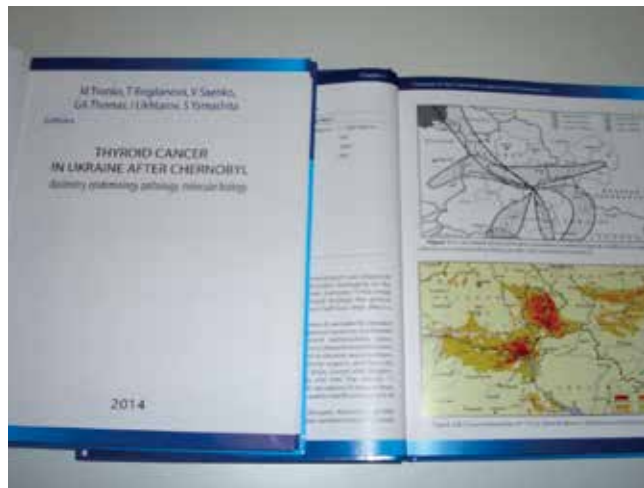
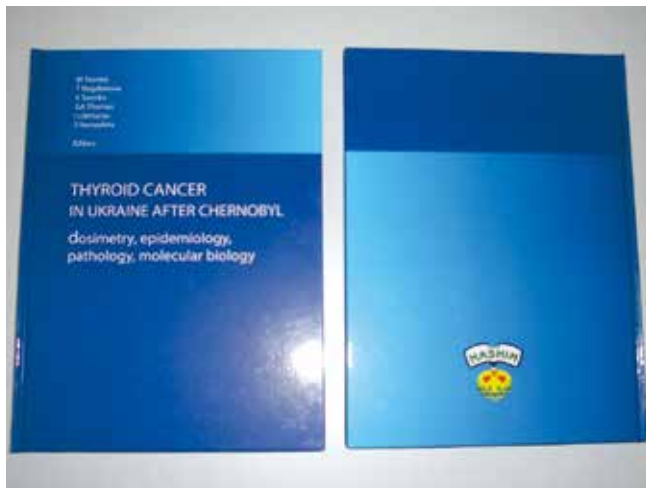
内分泌学者や内分泌病理学者は、チェルノブイリの事故の規模とその特異性により極めて困難な問題に直面しました。ウクライナにはがんの登録制度が無く、甲状腺がんの発生率についての正確な統計情報はありませんでした。

世界の一流の病理学者が関わって、甲状腺がんの臨床形態学的データベースの創設、組織塊や組織片の病理学的保存、WHOの分類に基づく診断の検証により、チェルノブイリ原発事故後10年目までには、ウクライナの統計データと病理学的診断に対するWHOの専門家が不信をもった問題は軽減しました。放射線量を測定する専門家との緊密な共同研究では、小児甲状腺がんの発生率増加における放射線の影響が証明されました。

科学的共同研究の好事例として、国際的なプロジェクトである「チェルノブイリ組織バンク」(CTB)は、疑い無く非常に重要なものになっています。私は、ウクライナにおけるCTBの創設とその維持管理の責任を負っておりまして、ここ10年間は、このプロジェクトの病理委員会の議長をしております。チェルノブイリ事故後における最も重要な甲状腺がんの分子生物学的研究が世界の先導的な科学施設で行われ、CTB全体の検体のうち70%以上がウクライナ人のものであったということは、誇りをもって言うことができます。

チェルノブイリ事故後の全期間を通して、日本の皆さんには、ウクライナに対して計り知れない支援をしていただいたことを強調する必要があります。具体的には、笹川記念保健協力財団、長崎大学、そして長崎・ヒバクシャ医療国際協力会(NASHIM)です。

長期間に亘る良好な科学的共同研究は、私どもの研究所や私個人と、長崎大学、とりわけ山下俊一教授に率いられた原爆後障害医療研究所健康リスク制御部門を結びつけています。その成果の一つは、国際的なチームが執筆し、チェルノブイリ原発事故後の甲状腺がんについての疫学的、線量測定学的、組織病理学的、分子生物学的研究における20年間の経験を概説した英語版研究論文集「チェルノブイリ原発事故後のウクライナにおける甲状腺がん」です。この本は、NASHIMが2014年に発刊したということのみならず、事故の影響があった国々の研究施設や放射線関連の甲状腺病理学を研究しているヨーロッパやアメリカの主要な研究施設へ無償で配布されました。



2014年 NASHIM 発刊 英語版研究論文集「チェルノブイリ原発事故後のウクライナにおける甲状腺がん」
※この本と前出「チェルノブイリ：虚偽と真実」（邦訳）は、NASHIM ホームページの「PDFファイル書簡」
（<http://www.nashim.org/jp/pdf/index.html>）からダウンロードができます。

ここ数年は、長崎大学及び福島医科大学並びに神戸市の隈病院とともに、放射線の影響の有無を問わず、甲状腺乳頭がんの大規模な組織病理学的特徴の研究を実施しています。このプロジェクトで、既に、さまざまな論文が「Endocrine Journal」、「Thyroid」、「Cancer Science」などの有名な科学専門誌に掲載されています。

私はNASHIMに心より感謝しております。そして、ウクライナ及び日本のそれぞれの共同研究者が、その研究の公開に貢献したと信じており、第12回永井隆平和記念・長崎賞受賞というこの素晴らしい栄誉は、共同研究者とともにやってきたことに対して与えていただいたものと受け止めております。



敬愛する永井博士の精神を受け継ぎ、ボグダノワ教授の研究はこれからも続く……………

ブロンズ像「生命のともしび」

歴代の永井賞受賞者に賞牌として贈呈

NASHIMでは、「永井隆平和記念・長崎賞」の制定以来、「生命（いのち）のともしび」を第1回から今回に至るまで、歴代の受賞者に賞状楯とともに贈呈してまいりました。

“ともしび”は人間の命にたとえられることがよくありますが、この像の製作者であります長崎大学教育学部の故 佐藤敬助 教授は、その揺らめく“ともしび”を少女の命とみなし、少女の像をとおして人間の命に対する慈^{いつく}しみや命の大切さを表現しています。



1995年3月製作 高さ34cm（台座を除く）

【製作者 佐藤敬助（さとう けいすけ）教授のプロフィール】

1951年10月24日～2017年12月5日

〈職歴〉

1980年5月	長崎大学教育学部	講師
1984年4月	//	助教授
1996年4月	//	教授（彫刻担当）
2017年3月	//	定年退職
2017年5月	//	名誉教授

〈活動実績〉

日展（日展会員）
日彫展（日本彫刻会会員）
五月会展
長崎県選抜作家美術展（運営委員・選抜作家選考委員）
長崎県美術協会展（長崎県美術協会副会長）
長崎県展（長崎県展実行委員・審査員）
爽創会展等に出品

この度、佐藤教授のご遺族が、自宅に残された2体の「生命（いのち）のともしび」を長崎市と長崎大学原爆後障害医療研究所に寄贈されました。これらは、長崎市上野町の「長崎市永井隆記念館」と長崎大学坂本キャンパスの「長崎大学医学ミュージアム」に展示される予定です。



長崎市永井隆記念館



長崎大学医学ミュージアム

国際貢献事業

JAEA(日本原子力研究開発機構)の研修に海外から参加した原子力規制に係る官庁職員等への講義

JAEAの「核物質防護(PP)と国内計量管理制度(SSAC)に関する2週間のトレーニングコース」に参加した研修生が平成30年10月26～27日に被爆地訪問として長崎を訪れました。

初日の26日、長崎原爆資料館会議室において、NASHIMより派遣した長崎大学原爆後障害医療研究所の高村昇教授が、長崎原爆での被ばくとチェルノブイリや福島原発事故との放射線の影響の比較等の講義を行いました。



講義の様子 (1)



講義の様子 (2)

受講者 11ヵ国+JAEA職員 合計27名

- ① オーストラリア ② カンボジア ③ インド ④ ヨルダン ⑤ カザフスタン ⑥ モンゴル
⑦ フィリピン ⑧ タイ ⑨ ウクライナ ⑩ ベトナム ⑪ アメリカ合衆国



質疑応答の様子 (1)



質疑応答の様子 (2)

研修生の長崎訪問感想(抜粋)

- ・教授の講義は、知識を得ることができ、実に有益だった。
- ・最も感銘を受けたのは、高村教授の講義だ。この講義で、福島県で放射能汚染を最小限に抑えるために日本政府が可能な限りのあらゆる処置を取ったことを知った。
- ・高村教授による講義は、とてもためになり、大きな刺激になった。

第20回ながさき国際協力・ 交流フェスティバル

平成30年10月28日に長崎市内で開催されました「ながさき国際協力・交流フェスティバル」に出展しました。NASHIMでは、活動状況やヒバクシャ医療についての情報を掲載したパネルの展示、これまで発行した書籍の展示、小冊子「漫画で学ぶ長崎原爆」の配布を行いました。

主催者の（公財）長崎県国際交流協会によりますと、当日は、約2千人の参加者で賑わったとのことですよ。



NASHIM のブース



手前「長崎県国際課」
奥「KENYANS IN NAGASAKI」

フェスティバル当日、NASHIMでも他の団体と同じように「団体の活動を知ってクイズ」を出題しました。

Question

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会では、毎年、約1ヵ月にわたりチェルノブイリ・カザフスタン関連医師等受入研修を実施しており、4つの国の方が長崎に来られています。ロシア、ウクライナ、カザフスタンとあともう1つは、どこの国でしょうか？

（選択肢） ①ポーランド ②ベラルーシ ③ウズベキスタン

答えは、前号（44号）5ページをご覧ください。



NASHIM のブースに来ていただいたお客様



お隣りのブース「KENYANS IN NAGASAKI」
スタッフが持っているのは、ケニアの国旗

韓国への専門家派遣事業

韓国への専門家派遣を9月と12月に行いました。

第1回 平成30年9月2日～3日

① 派遣専門医師

- ・長崎大学 原爆後障害医療研究所 所長 宮崎 泰司 教授
演題『放射線による造血障害－長期影響－』
- ・長崎大学 原爆後障害医療研究所（腫瘍・診断病理学） 中島 正洋 教授
演題『原爆症と放射線関連甲状腺がん』

② 派遣先 昌原（チャンウォン）市 馬山（マサン）医療院



派遣先にて

第2回 平成30年12月2日～4日

① 派遣専門医師

・長崎大学 原爆後障害医療研究所 (分子医学)

永山 雄二 教授

演題『長崎・広島、チェルノブイリから福島における甲状腺がん』

・長崎大学 原爆後障害医療研究所 (国際医療保健福祉学)

高村 昇 教授

演題『長崎、チェルノブイリから福島を考える「クライシスコミュニケーション～リスクコミュニケーションでの体験から」』

② 派遣先 ソウル市 ソウル赤十字病院



派遣先にて

NASHIM

韓国専門家派遣事業のセミナーに参加して



長崎大学 原爆後障害医療研究所（分子医学） 教授 永山 雄二

2018年12月3日、韓国のソウル赤十字病院で行われた平成30年度第2回NASHIM専門家派遣事業のセミナーに講師として参加しました。講師としては私と原研国際の高村教授で、県の担当の西さんと通訳の朴^{パク}さんも加わっての4人での出張でした。今回はいつもの福岡空港からとは異なり初の長崎空港発仁川着という旅程でした（帰りは福岡経由）。

セミナー会場のソウル赤十字病院は、1905年創立で113年の歴史を持ち、18診療科で、297ベッドの規模です。昨年の被爆者受診数が304名で多くの被爆者を診察されている医療機関です。今まで長崎での専門家受け入れ事業にも多くの方が参加されています。院長も一昨年来崎されています。また、病院の特徴としては貧困者、外国人居住者など弱者を対象とした医療提供と、それに関連してのホスピスの設置です。セミナー前には副院長の表敬挨拶後、ホスピスを見学させていただきました。

セミナーは、大韓赤十字社の方々の協力を得ながら、ランチョン形式で行いました。まず高村先生が「クライシスコミュニケーション～リスクコミュニケーションでの体験から」というタイトルで、福島原発事故直後からのリスクコミュニケーション活動、川内村での帰村支援についてのセミナーでした。キノコ・山菜の放射線量の比較スライドなどは、笑いを誘いました。セミナー後は、除染労働者の被曝状況、コンフレバックの処理、除染に用いた水の放射線量などについての質問が続きました。

次に私が「長崎・広島、チェルノブイリ、福島における甲状腺がん」というタイトルで、3つの地域での甲状腺がんの特徴について比較の結果をセミナーしました。1 cm以下の甲状腺微小がんをどう扱っているのか、アメリカ甲状腺学会で微小がんの取り扱いについて、福島での小児甲状腺がんが放射線によるものではないとすればなにが原因なのか、などの質問をいただきました。

2つのセミナーを高く評価していただき、感謝の辞をいただきました。我々が蓄積した研究実績を韓国でのヒバクシャ医療に生かし、韓国被爆者の診察・治療にあたる医療関係者の方々にヒバクシャ医療、ひいては放射線人体影響についてさらに関心を持っていただくために、このセミナーの重要性をしみじみと感じました。

最後になりましたが、今回のセミナー開催にあたってご尽力頂いたソウル赤十字病院の皆様、大韓赤十字社の皆様、西さん、朴^{パク}さんに感謝申し上げます。

韓国医師等の受入研修事業

韓国医師等の受入研修を10月と1月に行いました。

第1回 平成30年10月21日～25日

【日程概要】

- 10/21 長崎へ到着
- 10/22～24 関係先訪問・見学、長崎大学での講義
- 10/25 長崎より帰国

【研修生名簿】

- | | | |
|---------|-----------|-------|
| 1. 趙 東濟 | ソウル赤十字病院 | 医師 |
| 2. 徐 榮範 | 嶺南大学病院 | 医師 |
| 3. 金 貞賢 | トンヨン赤十字病院 | 看護師 |
| 4. 金 美那 | 釜山報勳病院 | 看護師 |
| 5. 安 成富 | 韓国原子力医学院 | 救急救命士 |
| 6. 朴 修哲 | 韓国原子力医学院 | 医師 |
| 7. 孫 泰周 | 国軍咸平病院 | 医療事務 |
| 8. 金 大祐 | 釜山大学病院 | 救急救命士 |



平和公園にて

第2回 平成31年1月27日～31日

【日程概要】

- 1/27 長崎へ到着
1/28～30 関係先訪問・見学、長崎大学での講義 (ブラジル医師との合同研修)
10/31 長崎より帰国

【研修生名簿】

- | | | |
|---------|-----------|------|
| 1. 李 鍾侑 | ソウル赤十字病院 | 医師 |
| 2. 李 叭淑 | サンジユ赤十字病院 | 看護師 |
| 3. 金 京玉 | キョンヒ医療院 | 看護師 |
| 4. 洪 景珉 | 釜山テドン病院 | 医師 |
| 5. 朴 銀珠 | トンヨン赤十字病院 | 看護師 |
| 6. 李 京子 | 釜山医療院 | 看護師 |
| 7. 安 力 | ウルサン大学病院 | 医師 |
| 8. 鄭 丞皓 | 韓国原子力医学院 | 医療管理 |

平成31年度の出前講座



平成31年度の出前講座の講師と授業メニューをご紹介します。
対象は小学5年生～中学3年生です。

長崎大学 原爆後障害医療研究所 (放射線生物・防御学)

教授 **松田 尚樹**

①放射線って何？身近な放射線の話 90分 (短縮可)

人間の五感では感じることはできない放射線が自然界にも存在していることを、教室内の空間線量、及びダシ昆布、塩化カリウム粉末、岩盤浴の石粉末など身近な物質からの線量を、講師が放射線測定器 (GMサーベイ、NaIサーベイ) で検出してみせることにより、生徒さんに実感、理解させます。また、放射線の発見から、これまでの応用について、多くの写真をもとにビジュアルに紹介します。以上により、自然放射線と放射線の利点に関する正しい知識が身に付くようにします。

②放射線・紫外線とわたしたちの健康 90分 (短縮可)

放射線や紫外線が私たちの身体に及ぼす影響と、その理由について、イラストを多用したスライドとクイズ形式の質問によって易しく解説し、その防御方法についても紹介します。それによって、放射線や紫外線の影響を正しく理解し、正しく怖がることができるようにします。

③【実習】 測ってみよう放射線 90分（短縮可）

放射線の基本と単位を簡単に説明した後に、身の回りの放射線を測定し、それらの放射線がどこから来ているのかを考察させ、私たちが自然放射線の中で生活していることを理解できるようにします。



人体最初の X 線写真
(アンナ・ベルタ・レントゲン)



放射線測定器



長崎大学 原爆後障害医療研究所

客員教授 三根 真理子

①長崎原爆の話・原爆直後の救護活動と調査 90分（短縮可）

原爆直後の混乱状況下で生き残った医師たちが行った被災者の救護活動及び調査について紹介します。それにより、原爆後の医療活動や調査について理解できるようにします。

②長崎原爆の話・長崎原爆被爆者のこころの調査 90分（短縮可）

原爆直後の被爆者のこころの状態を紹介し、現在のこころの状態についての調査結果を紹介します。それにより、被爆者のこころの傷について理解できるようにします。

※出前講座の詳細は、NASHIMのホームページ (<http://www.nashim.org/>) をご覧下さい。